校長室より　　第３３号

「天空高き」

平成２４年４月１０日

創立 115 年という節目の年を迎えて

４月 10 日は高水学園の開校記念日です。今年は創立 115 年という節目の年になります。

今回の開講記念講演会には、昭和 42 年に本校を卒業された木村芳幸先輩をお招きしています。3 月末に東京で本学園の関東支部同窓会が開催されましたが、そこでお会いして、改めて今回の記念講演についてお願いしました。後輩の皆さんの前で講演されることをとても喜んでおられました。その会には、昨年、中学校と六年制普通科合同で講演をいただいた、北林先輩（昭和４６年卒）も同席されていました。また、関東支部の代表世話人は、課長島耕作シリーズで有名な、弘兼憲史（昭和４１年卒）先輩です。次ページには、今回の講演の参考になると思い、弘兼憲史先輩と木村芳幸先輩の対談を掲載しておきました。（「イブニング」講談社、2008.5.27）

ところで、高水学園の同窓会支部は山口県内ばかりでなく、九州には福岡・佐賀支部、関西支部、関東支部があります。皆さんが本校を卒業すると、同窓会の会員になります。皆さんが就職や進学された場所で、多くの先輩が活躍されています。是非、その地で開催される同窓会に出席していただきたいと思います。思わぬ出会いがあるかもしれません。

木村　芳幸氏の紹介と経歴

家族　妻と子ども（男、女）２人　趣味　読書、スポーツ観戦

１９５０年　　岩国市に生まれる
１９６３年　　高水高校付属中学入学
１９６９年　　高水高校卒業
１９７９年　　東京大学大学院工学系研究科（原子力工学専攻）博士課程修了
１９７９年　　東京芝浦電気（株）（現（株）東芝）入社
　　２５年間　主として原子力プラントの開発・設計に従事
２００４年　　東芝燃料電池システム（株）　代表取締役社長
　　家庭用燃料電池システムの開発・事業化に従事
２０１１年　　顧問に就任　現在に至る

構成:クォータ・スタッフ 撮影:林柱多

島耕作がいよいよ社長に就任!!
これを記念して、弘兼氏が様々な企業の社長を迎え、「社長の仕事」に迫るスペシャル・企画の特別編がイブニングに登場!
今、注目の家庭用燃料電池の開発に取り組む東芝燃料電池システム株式会社代表取締役社長・木村芳幸氏と弘兼憲史氏がトークを語る。
実は彼三人は同じ高校の出身という間柄。思い出話にひとしきり花を咲かせた後、静かに対談がスタートした。

東大で研究を続けるよりも人々の役に立つモノ作りがしたかった

弘兼　木村社長とは山口県岩国の同郷で、なんと、高校も同じなんですよね。

木村　はい。3歳下ですから、私が付属中学1年生の時、弘兼さんは高校1年生でした。でも弘兼さんは有名人ですから、もちろん同窓生であることは以前から存じ上げておりました。

弘兼　岩国の高校を卒業して、木村さんは東大に進まれて、東芝に入社されたわけですが、どういう経緯だったんですか?

木村　もともと私は原子力が専門なんですよ。東大では原子力工学を専攻しまして、大学院に進んで、ドクターも持っています。その時、たまたま大学の非常勤講師として東芝の方が来られて、それで誘われて入社しました。

弘兼　大学に残って研究を続けるとか、電力会社に入るという選択肢もありましたよね。

木村　そうですね。ただ小さい時からモノを作ることが好きで、大学で研究をしているよりも、メーカーに入って、実際に人々の役に立つモノを作りたかったんです。それが本当の工学だと思っていますから。

弘兼　なるほど。ところで今度、島耕作が社長に就任することになりまして。

木村　おめでとうございます。

弘兼　この「イブニング」では、その島耕作の若い頃の話を描いているんですが、木村社長は入社した頃はどんな社員だったんですか?

木村　そうですね。東芝に入ったのは28歳

特別編 弘兼憲史 社長対談

50歳を過ぎてまたイチから（木村）

の時で、もう結婚もしていました。

弘兼　そうなんですか。

木村　入社した時は、やはり原子力プラントの設計、開発を一生懸命にやろうと思っていましたので、とにかくがむしゃらでした。

弘兼　家庭を顧みず（笑）。

木村　そうですね（笑）。当時は残業もよくやりましたし、確かに大変でしたが、やりがいはありました。**日本の電気事業を支えていくんだ**という意気込みがありましたから。

弘兼　熱血型の社員だった？

木村　そうだったかもしれません。ただ**主任や課長になるうちに部下の扱い方も勉強して**、だんだん丸くなっていきましたが（笑）。

燃料電池の価格をベンツの高級車から軽自動車にするのが目標

弘兼　原子力の開発にずっと携わってきた木村さんが、燃料電池の新会社の社長をやれと言われたときはどうでしたか。

木村　びっくりしましたよ。東芝はすでに第三者から燃料電池の開発を進めていて、ある程度情報は知っていましたが、まさかそれを自分がやるとは考えてもいませんでした。

弘兼　社長室に呼ばれたわけですか。

木村　いえ、3週間ぐらい前にメールで。

弘兼　メールですか!?

木村　その時はまったく事情が把握できなくて、これは何ですかと聞きにいきました（笑）。

弘兼　それまで100万kwの原子力発電を開発していた木村さんが、1kwの家庭用燃料電池を作るということになって、気持ちの切り替えはすぐにできたんですか。

木村　まったく新しい商品ですから、非常にやりがいはあるなと思いましたね。ただ自分が今までやってきた技術とは違う分野ですから、そこをどうするかと。社長ですから当然経営のことも考えなければいけないんですが、**新しい技術の開発会社ですから、まず自分自身がその技術を知らなければいけない**、それが大変だなあと思いました。50歳を過ぎてまたイチから勉強ですから（笑）。とにかく今は'09年からの本格的な販売開始に向けて懸命に開発を進めているところです。

「100万kwの原子力発電から、一転して1kWの家庭用燃料電池の開発ですか」（弘兼）

弘兼　**燃料電池をついに家庭で使えるようになる**わけですよね。ちなみにこれを家庭に一台置くとするとコストはどれくらいですか。

木村　'04年に私がこの会社に来た時は、まだまだ手作りで量産できませんから、ベンツの高級車ぐらいはしていたんですよ。今はその10分の1ぐらいまで下がってきていますが、本格的に商品化するときには、軽自動車の価格まで持っていくのが目標です。

弘兼　燃料電池を家庭で使うというのは世界的な動きなんですか。

木村　今、**日本が世界のトップを走っている**

地球環境にやさしい「燃料電池」とは？

東芝と米国IFC社の合併会社を前身に、2004年に家庭用燃料電池の開発に特化した会社として設立されたのが東芝燃料電池システム株式会社。「燃料電池」とは、都市ガスやLPガスなどから取り出した水素と空気中の酸素を利用して、水の電気分解の逆の化学反応で電気を作る新システムで、家庭用としてkwクラスの開発が進められている。「地球環境に配慮した発電システムです。電気を作るだけでなく、同時に発生する熱を使って給湯に利用したり、いわゆるコージェネレーションが家庭で実現します。2005年から国の主導で全国の一般家庭約500世帯に実際に設置して実証実験を進めており、1世帯1年間あたり省エネ効果は灯油約10缶分、CO^2削減量は約1500m²の森林が吸収する量など、そのメリットはきちんとした数字として実証されています」（木村氏）

る技術ですから、まずは日本でしっかり普及させて、コストも安い、信頼性も高い商品だっていうことになれば、ゆくゆくは海外で有効な商品になると思っています。

社員たちには「会社としてソフトパワーを持とう」といつも話している

弘兼　世界的に環境問題が高まる中で、今後は会社をもっともっと大きくしていかなければならないですね。そんな木村さんが社長として心掛けていることってありますか。

木村　開発がメインの会社ですから、スケジュールも目標も決まっていて、それに対してきちっと**ロードマップを作って、開発が進んでいるかをチェックする**のが私の仕事ですが、まずは社員とのコミュニケーションですね。開発は一人ではできない、チームとしてやることの大切さを若い頃に学びましたから。それから私がみんなの前でよく言うのは「会社としてソフトパワーを持ちなさい」ということです。ソフトパワーというのは会社側から見ればブランド力ということになるのでしょうが、そうではなくて、お客様や納入業者さんから見た時に、あの会社の人間はいつも一生懸命やっている、きちんと約束は守る、明るく議論しながら目標に向かってやっている**気持ちのいい会社だな**と思ってもらえる。そういう会社になろうよと。

弘兼　みんなが気持ちよく仕事ができる会社ということですね。今すごくお忙しいと思うのですが、木村さん個人の趣味って何ですか。

木村　スポーツ観戦と読書ですね。野球少年だったんで、とくに野球観戦が大好きです。実は息子が小学生の時に少年野球チームに入りまして、その時にコーチとしてスカウトされて、最後は監督もやらせてもらったんですが、これがすごくおもしろかった。**子供たちの個性をどう伸ばすか、下手な子でもどうやってヤル気を起こさせるかって。**

弘兼　それは現在の社員マネージメントにもつながってるんじゃないですか(笑)。

木村　そうですね。すごく役立っているかもしれません(笑)。

弘兼　今日はいろいろと勉強になりました。家庭用燃料電池のことは、**いつか漫画の中で使わせていただきます。**

2人は同じ高校の先輩・後輩。